「祈りの闘い—誘惑に陥らないために」

ルカ 22:39-46

2021.1.17 南与力町教会朝拝

**序：文脈と特徴**

今聖書を目で追いながら朗読を聞かれた方は、43 節、44 節には括弧がついていることに気づかれたかもしれません。なぜ括弧がついているかというと、この言葉がもともと入っていたのか、後から付け加えられたものなのかよくわからないからです。聖書はもともとの本が残っているわけではありません。それを書き写していったたくさんの「写本」が残っています。その「写本」の中には古い有力なものと、もっと後代のそれほど重要でないものがあります。そしてこの 43 節 44 節は古い重要な写本の中に入っているものもあれば、入っていないものもあるのです。そこでこの言葉がもともとルカ福音書に入っていたものなのか、それとも後から付け加えられたものなのか判断が分かれるわけです。難しい問題なのですが、私の今の段階での結論としてはこれはもともとルカ福音書にあった言葉と考えてよいと思っています。確かに有力な写本の中には入っているものと入っていないもの両方あるのですが、それらの写本よりもさらに古い時代にユスティノスという教父はこの言葉に言及しているのです。それはこの言葉がもともとルカ福音書に入っていたという間接的な証拠になります。またこの 43 節 44 節は福音書記者ルカの文体に似ているということが学者によって指摘されています。また内容に関しても、ここでは天使が天から現れるわけですが、ルカ福音書のクリスマス物語には天使が現れる場面がいくつか出てきます。そのように文体や内容から見て、ルカが書いた可能性が高いと判断できます。ではなぜこの二節がない写本があるのでしょうか。これもよく言われることですが、ここでイエス様が天使から助けられたということが、イエス様の神性、すなわちイエス様が神であることにそぐわないと考えた写字生（写本を写す人）がこの言葉や描写を省いたのではないかと考えられます。以上のような理由から、新共同訳では括弧がついていますが、この 43 節 44 節ももともとルカ福音書に記されていたものとして読んでいきたいと思います。

今日の箇所の前のところまで、イエス様は最後の晩餐の席で弟子たちに様々な教えを語ってこられました。それは言わばイエス様から弟子たちへの別れの説教、告別説教でした。その最後のところでイエス様は弟子たちに迫っている危機に対して備えをするよう忠告しておられました。そしてイエス様は告別説教を終え、その部屋を出て、オリーブ山へと行かれました。そして弟子たちもイエス様に従っていきました。

マタイやマルコではそれが「ゲツセマネ」（油搾り）という場所であったと記されていますが、ルカはそのような場所の名前を記していません。ルカはその代り、39 節でイエス様が「いつものように」オリーブ山に行かれた、と記しています。「いつものように」とは「習慣に従って」と訳すことができます。ルカ福音書 21 章 37 節には「それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた」とあります。それを受けて今日の箇所では「いつものように、習慣に従って」イエス様がオリーブ山に行かれた、と言われているわけです。そして 40 節では「いつもの場所に来ると」と言われています。これが「ゲツセマネ」の園だったわけですが、イエス様はこの日だけでなく、いつもこの場所で祈っておられたのでしょう。そしてイエス様は弟子たちに言われまし

た。
「誘惑に陥らないように祈りなさい」。
そしてこの忠告は今日の箇所の最後でも繰り返されています。
22 章 46 節
「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」
　すなわち今日の箇所はこのイエス様の言葉「誘惑に陥らないように祈っていなさい」という言葉によって挟み込まれている構造になっています。そしてその中心にあるのがイエス様ご自身の祈りです。

**１．誘惑に陥らないために**

　ではイエス様が弟子たち「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた「誘惑」とはどういうものでしょうか。イエス様は 22 章 31 節で次のように語っておられました。
「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。」
　イエス様はシモン・ペトロを始めとした弟子たちがサタンによってふるいにかけれられること、すなわちサタンの試み、サタンの誘惑に遭うことを予告しておられたのです。今日の箇所の「誘惑に陥らないように」とは、そういうサタンの誘惑に陥らないように、その中に入り込んでしまわないように、祈りなさい、ということなのです。
　このサタンの誘惑についてはイエス様の宣教の初めのところで語られていました。ルカ福音書 4 章「荒野の誘惑」と呼ばれる箇所ですが、そこでイエス様はサタン（悪魔）から様々な誘惑を受けられました。しかしイエス様は旧約聖書の御言葉を引用され、神の言葉という剣をもってサタンの誘惑のすべてを退け、打ち勝たれたのです。その場面の最後 4 章 13 節は次のように終わっていました。
「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」
　そしてこの悪魔が再び現れるのが、22 章 3 節です。
「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。」
　サタンはイエス様の十二弟子の一人ユダの中に入り、再びイエス様を誘惑しようとするのです。もちろんイエス様はそれに以前にも誘惑や試練に遭われたでしょう。イエス様は 22 章 28 節でこうおっしゃっていました。
「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。」
　ここで試練と訳されている言葉は、今日の箇所で「誘惑」と訳されている言葉と同じです。イエス様はこれまでにも様々な試練・誘惑を受けて来られたわけですが、特に十字架の時というのはイエス様がサタンから最後にして最大の誘惑を受けられる、そのような時でもあったわけです。そして先ほど 22 章 31 節で見たように、サタンはイエス様だけでなく、ペトロを始めとした弟子たちをも試みようとする、誘惑しようとするのです。イエス様が十字架という最大の試練を受けられる時に、弟子たちが果たしてイエス様と共に踏みとどまることができるかどうか。サタンはそのことを試みようと、テストしようとしていたわけです。イエス様はそのことをご存知でした。それゆえにイエス様は今日の箇所で、オリーブ山といういつもの場所で、ご自分が祈るだけでなく、弟子たちにも「誘惑に陥らないよう祈りなさい」と言われたのです。これはイエス様が「主の祈り」の中で祈るよう教えられたことでもあります（ルカ 11:4）。それを今こそ実践するようイエス様は弟子たちに言われたのです。

しかし結果はどうだったでしょうか。22 章 45 節には次のようにあります。
「イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」
「悲しみの果てに」と言われています。弟子たちはイエス様がもうすぐ死んでしまうことがわかっていたのでしょう。そうしてイエス様と別れなければならないことを弟子たちは悲しんでいたのだと思われます。深い悲しみは人の心を擦り減らせ、疲れさせます。そのように深い悲しみのゆえに弟子たちは眠り込んでしまっていた、とルカは記すのです。それをご覧になったイエス様は弟子たちに言われました。
「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

ではこの後、弟子たちは祈ることができたでしょうか。今日の箇所に続く 22 章 47 節には次のようにあります。
「イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。」
結局、弟子たちは祈ることができませんでした。それゆえに彼らは誘惑に陥ってしまうことになります。イエス様の十字架という最大の試練の時に、彼らはイエス様と一緒に踏みとどまることができなかったのです。弟子の代表であるペトロも「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と豪語していたにも関わらず、イエス様が言われた通り、この日の朝、鶏が鳴く前に三度もイエスを知らないと言うことになってしまったのです。

「誘惑に陥らないように祈りなさい」。
これは今も私たちが聞くべきイエス様からの言葉であり、忠告です。祈らなければ、私たちはいとも簡単にサタンの誘惑に陥ってしまいます。そしてサタンは今も私たちを誘惑に陥れようと狙っているのです。ペトロの手紙第一の５章８節から９節には次のようにあります。お聞きください。
「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおりです。」

サタンの食い物にされないように、私たちは目を覚まして祈っている必要があるのです。

**２．主イエスの祈りにおける苦闘**
では私たちはどのように祈ればよいのでしょうか。今日の御言葉の中心に記されているイエス様の祈りこそ、私たちが見習うべき祈りの模範です。

**・祈りの姿勢**
41 節の最後のところを見ると、イエス様は「ひざまずいて」祈られた、と記されています。当時ユダヤ人たちは「立って」祈るのが普通でした（ルカ 18:11, 18）。しかし、イエス様は「ひざまずいて」

祈られました。そして使徒言行録を見ると、パウロや教会の人々がひざまずいて祈る姿が出てきます（使徒 21:5）。またエフェソの信徒への手紙３章１４節でパウロは次のように言っています。
「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。」

このようにひざまずいて祈る姿勢というのは、オリーブ山でイエス様がひざまずいて祈られたことに起源があると考えることができます。「立って」ではなく、神様の前にひざまずいて祈る。これは神様に対するへりくだりや従順を表わしていると言えます。父なる神様の前にひざまずいて祈る。実際にひざまずかなったとしても、そのような姿勢、心の態度で祈ることをイエス様の祈りの姿勢から教えられたいと思います。

**・祈りの内容**

ではイエス様はこのとき、どのような祈りをささげられたのでしょうか。42 節
「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」

主イエスは神に「父よ」と親しみを込めて、神の子として祈ります。イエス様は主の祈りの中で弟子たちも神に「父よ」と呼びかけるよう教えてくださっています（ルカ 11:2）。

そしてイエス様はこの時、「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」と祈られました。「この杯」とはイエス様の十字架を指しています。イエス様は、できるならこの十字架という杯を自分から取りのけてほしい、そのように願い、祈られたのです。しかしそれは単に死ぬのが恐いということだけではありません。「杯」とは旧約聖書において「神の怒りの杯」として出てきます（イザヤ 51:17、エレミヤ 25:15）。それは神に背き罪を犯した者が受けなければならない神の怒りや裁きを表わすものです。イエス様ご自身は何の罪を犯されなかったのですから、そのような杯を飲まなくてもよいはずです。しかしイエス様は多くの人の罪をその身に負い、多くの人の罪に対する神の怒りと裁きを一身に受けなければなりませんでした。そのような「神の怒りの杯」を飲むことがどれほど恐ろしく、苦しいことなのか、わたしたちにはわかりませんが、イエス様はわかっておられたのです。イエス様は前々からご自分の苦しみと十字架の死が神様のご計画であることを弟子たちに語っておられました。それがご自分に対する神様の御心であると知っておられました。しかし、いよいよ敵に捕らえられるというその直前でイエス様はこのような祈りをささげられました。イエス様は神の子であるから、何の恐れも苦しみもためらいもなく、平然と十字架の死へと進んでいかれたというわけではなかったのです。イエス様は神の子でありながら、いや神の子であるからこそ、その父なる神から見捨てられ、神の怒りと罰を受けることがどれほど恐ろしいことであるかをご存じだったのです。それでイエス様は祈られました。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」。

しかしイエス様は何としてもわたしの願いを聞いてください、と祈られたのではありませんでした。「御心なら」とイエス様は言われます。「父よ、あなたの御心なら、あなたがそうしようと思われるなら」こうしてください。あくまで父なる神様の御心が第一なのです。そしてイエス様の祈りはこう続いていきます。
「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」

イエス様はご自分の願いを願い続けられたわけではありませんでした。「この杯をわたしから取りのけてください」というご自分の願いを打ち明けられながら、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行なってください」、「私の思いではなく、あなたの思い、あなたの御心が成りますよう」、そのように祈られたのです。

このような祈りは私たちにとってなかなかできるものではないと思います。私たちは祈りと言えば、自分の願いを神様に祈ることだと思います。そして自分の願いが叶えられないと祈りが聞かれなった、と思うのです。もちろん自分の願いを神様に打ち明けることは祈りの大切な部分です。イエス様も率直に、素直に「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」と神様に祈られました。しかしイエス様の祈りはそこで終わらないのです。「しかし、私の願いではなく、あなたの御心が成りますように」。これがイエス様の祈りでした。そしてこれは主の祈りの第三の祈願「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」という祈りの中で私たちも祈るよう教えられていることなのです。そしてそれが「誘惑に陥らないための祈り」なのです。自分の思いが神様の思い、神様の御心に一致しているとは限りません。この時のイエス様でさえそうでした。もしイエス様が「この杯をわたしから取りのけてほしい」という自分の思いに従って突き進んでいったとしたらどうなったでしょうか。イエス様の十字架は実現せず、私たちを救おうとされる神様の救いのご計画は台無しになっていたのです。それはすなわちイエス様がサタンの誘惑に陥ってしまったことを意味します。サタンは私たちの思いや願いにつけ込んで誘惑していきます。それは単にわたしたちの欲望につけ込んで誘惑するということにとどまりません。苦しみを避けたい、回避したい、そこから逃れて楽になりたい。そういう人間として当然の思いをも用いてサタンは私たちを誘惑することがあるのです。その時、自分の思いに従って苦しみから逃げてしまうなら、結局はサタンに誘惑に陥ってしまうということが起こり得るのです。そうならないために、私たちは祈る必要があるのです。この苦しみから逃れさせてください、この苦しみを取り去ってください、と祈ることは許されます。しかし最終的に私たちが優先させるべきは「神様の御心」なのです。イエス様の十字架が神様の御心であったように、私たちもそれぞれに負わなければならない十字架、苦しみというものがあります（ルカ 9:23）。そこから逃れてしまうことが結局は神様の御心に背き、サタンの誘惑に陥ってしまうことがあり得るのです。そうならないために、私たちは、自分の願いや苦しみを神様に打ち明けつつ、しかし「私の願いではなく、神様の御心が成りますように」と祈り、委ねる必要があるのです。イエス様の祈りは、自分の思いに神様を従わせようとするのではなく、神様の思いに自分を従わせようとするものでした。そこにサタンの誘惑に打ち勝つための祈りの秘訣があるのです。

**・天使の助けと祈りにおける苦闘**

このよう祈りをイエス様がささげると 43 節
「すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。」
そして 44 節
「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」

神様はイエス様の祈りの応えるようにして、天から天使を遣わされました。しかしそれは十字架とい

う杯をイエス様から取り去るためではありませんでした。そうではなくイエス様を力づけるため。そうしてイエス様が苦しみ悶えながらも、いよいよ切に、熱心に祈ることができるように、神様は天使を通して助けられたのです。イエス様の苦しみは「汗が血の滴るように地面に落ちた」という表現にも表されています。実際に血の混じった汗が出たわけではないでしょう、しかし血のしずくのように、大きな汗の粒が地面にぼたぼたと落ちたのだと思います。イエス様はそのようにして祈りにおいて、苦闘されました。祈りの中でサタンの誘惑と闘われたのです。そしてそのような祈りの苦闘を経たからこそ、イエス様は十字架の死に至るまで、サタンの誘惑に屈することなく、父なる神様の御心に従順に従い抜かれたのでした。それは弟子たちがイエス様に従い抜くことができず、サタンの誘惑に陥ってしまったのとは対照的です。

**結論**

わたしたちはここに出てくる弟子たちのように、祈るべき時にも祈れない弱さ、それゆえにいとも簡単に誘惑に陥ってしまう弱さがあります。しかしイエス様はそのような私たちを見放すことなく、繰り返し言って下さるのです。

「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

そしてイエス様の祈りこそ、私たちが見習うべきお手本です。そして私たちがそのように祈ることができるよう神様は「聖霊」によって私たちを力づけ、助けてくださいます（エフェソ 6:18）。